

関西学院大学 研究成果報告

2022年 3月 31日

関西学院大学 学長殿

所属：経済学部
職名：教授
氏名：増 永 俊 一

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	Nathaniel Hawthorne作家・作品研究及び19世紀アメリカのツーリズム勃興と文学表現
研究実施場所	個人研究室、大学図書館
研究期間	2021年 4月 1日 ～ 2022年 3月 31日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

19世紀前半のアメリカは、政治的にも経済的にも急速に国力を高め、さらに文化的にもヨーロッパの影響から脱し文化的独立をも果たそうとする気運がひととき高まった時期でもあった。ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne: 1804-64)は、当時の文化的独立の一翼を担ったアメリカ文芸復興期の作家の1人である。

ホーソンの著した諸作品はしばしばアメリカの過去に取材し、代表作『緋文字』(1850)も舞台は17世紀ピューリタン植民地だ。この時代に彼が目を凝らすこと背景には、先祖がウインスロップと共にマサチューセッツ湾岸植民地に入植した古い家系であるというホーソン自身のパーソナルな事情があったが、同時に、アメリカのナショナル・アイデンティティ探求というパブリックな目論見も内在していた。ホーソン作品に顕著な歴史性は、文化的独立を希求していた時代の要請と決して無縁ではない。

ピューリタン植民地は、近代のヨーロッパ列強による拡張政策と連動するアメリカの起点

のひとつであるが、ホーソーンが描き出す植民地は白とも黒とも付かない鈍色の社会だ。そして、そこで展開される罪と罰のドラマの苛烈さと、疎外や孤独というものに多くの読者は惹き付けられてきた。ホーソーンは、大学卒業後定職に就くこともなく故郷セイラムに舞い戻った。そして、十数年に涉って屋根裏部屋に引き籠もってひたすら読書と創作に明け暮れたが、この経緯から彼には孤高の芸術家というイメージが常に付きまとう。しかし、孤独や疎外と言ったものがホーソーン作品のモチーフであることは確かではあっても、作家自身が「ナイト・スケッチ」(“Night Sketches, beneath an Umbrella,” 1838)の「私」のように人目を避けて夜道を彷徨するような隠遁者であったわけでは必ずしもない。むしろ、早くも大学進学を見据えた17歳の頃から、生活の術として、すなわち職業として作家であることをホーソーンが強く意識していたことに改めて注目しなければならない。

今回の特別研究期間の課題は、(1)ホーソーンの家・作品研究と(2)19世紀アメリカのツーリズム勃興とそれがもたらした文学表現への影響の2つを掲げている。前者のテーマでは職業作家としてのホーソーンの足取りを検証し、その創作技法の模索やストラテジーを解明することに力点を置いた。ホーソーンという作家と切り離すことが決して出来ないアメリカの「歴史」、乃至はアメリカの「過去」といったものが文学表現として如何に効果的に再現されているのか、そのことが今回の特別研究期間の研究テーマである。

最初に検討したのは、その模索が1つの完成形として見事に結実した『緋文字』である。

①研究論文「古い建物とアイコンー職業作家ホーソーンの家創作技法(1)」(関西学院大学言語教育研究センター『言語と文化』第25号,2022年3月14日発行に掲載予定)は、異例の長さとなっている『緋文字』の序文にあたる「税関」の部分にまず焦点を当て、作家の時代である19世紀現在のアメリカから17世紀ピューリタン植民地に読者を巧みに誘うその戦略を考証した。

ヘンリー・ジェイムズは、その著書『ホーソーン』(Hawthorne, 1879)においてナサニエル・ホーソーンについての優れた考察を展開している。同書には文豪ならではの鋭い洞察が散りばめられているが、特に「小説家が豊かな洞察を形成するためには、歴史や慣習の蓄積、風習や典型の複雑さが必要である」という指摘は、ホーソーンが直面した問題を的確に言い当てている。さらにジェイムズは、新興国アメリカには「他国にはある、高度の文明の諸項目が生活の基盤から欠落している」とも言う。アメリカには君主はおらず、宮殿もなく、城郭もない。蕪の這った廃墟もなく、大寺院もない。アメリカにあって歴史を語ることは、絶望的に困難なことなのだ。

それでもホーソーンはあえて「歴史」を作品の重要なモチーフとした。かつて『緋文字』の邦訳はしばしば「税関」の部分に割愛していたが、「税関」が『緋文字』というロマンス全体にとって作品構成上極めて重要であることに今では異論がない。ホーソーンは、アメリカの19世紀において17世紀ピューリタン植民地時代の物語を紡いだ。「税関」とは、この2

世紀隔たった時間を円滑に接続する事を可能とする、ある種の装置なのである。歴史の浅いアメリカにあってそれでもそれなりに時を刻んできた古い建造物を登場させ、その建物の外側と内側に異なった時空間を構築するという。これが、ホーソーンがついに導き出した創作技法なのである。古い建造物の外側はすなわち19世紀現在の世界で、一歩建物に足を踏み入れれば、あたかもファンタスマゴリアさながらそこにアメリカの過去が幻のように映し出されてゆく。『緋文字』においてその建造物とは、ホーソーン自身が検査官として勤務していたセイラム税関であった。

文芸評論家のベイム(Nina Baym)は、『緋文字』の「税関」について税関の1階はホーソーンの外的な現実の世界であり、2階は彼の心の私的な現実の領域であると指摘している。そして、この19世紀現在の世界から17世紀アメリカを誘う引き金となったのが、「私」が税関の2階で「偶然」にも発見する古びた一片の布きれであった。他にもないAの文字が刺繍された「緋文字」である。職業作家の道を模索していたホーソーンは、アメリカに「欠落」している「複雑さ」を補うべく、古い建造物をアメリカの過去に誘う戸口とし、その建造物の内部に歴史を纏ったアイコン配置して、過去の幻をまざまざと現前させるという創作技法についに辿り着いた。『緋文字』はその完成形なのである。

『緋文字』の翌年早くも次作『七破風の屋敷』(1851)が刊行となるが、本作は前作のスキームを見事なまでに踏襲している。『七破風の屋敷』においては、古い建造物は更に前景化して「七破風の屋敷」そのものとなり、物語のタイトルとなっている。そして、「緋文字」に替わって、先祖伝来の「古い櫛の椅子」が象徴的なアイコンとして過去を呼び覚ます。『七破風の屋敷』の時代背景は蒸気機関車まで登場する19世紀現在のアメリカであるが、語り手がひとたび屋敷の中に置かれている「古い櫛の椅子」に言及すると、物語は突如160年前の屋敷の落成式の光景にまで遡及する。その日、この屋敷を建てた先祖ピンチョン大佐は、この櫛の椅子に腰を下ろしたまま不吉にも絶命している。

この「古い櫛の椅子」というアイコンについても、ここに至るまでのホーソーンの職業作家としての歩みに目を向けなければならない。『七破風の屋敷』に先立つこと10年前、ホーソーンは『おじいちゃんの椅子』(1841)という作品を書いている。これは児童向けの歴史物語で、おじいちゃんが幼い子供たちに古い櫛の椅子の代々の所有者について語り聞かせ、そのことでアメリカの歴史が語られるという趣向となっている。この椅子が、ホーソーンの本格的ロマンス第2作において、重要な小道具として再度登場したのだ。『緋文字』と『七破風の屋敷』が共通の創作スキーム有し、古い櫛の椅子が10年も前に書かれたホーソーンの児童文学作品に由来するという考察は、当方の知り得る限りこれまでの研究では指摘されてこなかった。②研究論文「古い建物とアイコンー職業作家ホーソーンの創作技法(2)」(掲載誌未定)は、以上のことを論じた。

③「職業としての作家ーナサニエル・ホーソーンの初版本をめぐるー」は、本学図書館

運営課からの依頼によって、大学図書館報『時計台』第90号(2022年4月発行予定)に寄稿したものである。本学図書館が準貴重図書として所蔵するホーソーンの4冊の初版本について、その発行の経緯と作家ホーソンについて関連する写真と共に概説するものであるが、児童文学執筆の背景も含めて、ホーソーンの職業作家としてプロフェッショナリズムに焦点を当てているという点で、上記2点の研究論文と共通している。

④「ホーソンとツーリズムー1832年の旅」（掲載誌未定）は、今回の特別研究期間の課題の2点目である「19世紀アメリカのツーリズム勃興とそれがもたらした文学表現への影響」と関連している。これもまた、ホーソーンの職業作家としての歩みを考えるという今回の研究テーマと共通する部分があって、存外に活動的であったホーソーンの作家修業時代に彼が実行したアメリカ北東部方面への取材旅行を考察した。本論では、この取材旅行後ホーソンが書きたいいくつかの旅のスケッチを検討し、作家としての模索の跡を辿った。そこには若い作家の創作上の行き詰まりも見られ、スケッチであるが為に視覚に過度に依存して破綻している作品もある。一方、一連の試行錯誤を経てホーソンはこの旅で確かに有効な創作技法の手がかりを得ている。後に『緋文字』で完成を見る、古い建造物を手がかりに過去に想像力をめぐらすという重要なスキームである。ホーソーンの旅のスケッチのひとつである「古いタイコンデロガー過去の絵巻」（1836）は、古い建造物を媒介に過去を現出させるというスキームの魁となっており、この考察も当方の知り得る限りこれまでのホーソン研究においては指摘されてこなかった論点である。

⑤「セオドア・ドゥワイト『北部方面への旅行者ーナイアガラの滝、ケベック、そして温泉地への経路』（1825）：抄訳」は、19世紀初頭に起こったアメリカ北東部への旅行ブームにおいてもっとも重用された観光ガイドブックである。この19世紀初頭に勃興した旅行ブームも、当時のアメリカにおけるナショナル・アイデンティティ確立への模索と無縁ではない。観光が余暇のひとつとなるためには、魅力的な観光地の開発、交通や宿泊施設などのインフラの整備、人々にあっては文字通り「レジャー」（“leisure”）という時間のゆとりと金銭的な余裕が必須となる。アメリカでは19世紀前半によりやくそれらの条件が整い、ツーリズム産業が勃興した。そして、人々はアメリカの雄大でサブライムな自然景観に国家としてのアイデンティティを認めようとした。ナイアガラの滝とはその頂点であり、当時にあっては究極の目的地であった。そういったアメリカ北東部方面に出掛けようとする観光客にとって、旅のガイドブックは必須のものであった。ホーソンが1832年の旅で辿った経路は、ドゥワイトの『北部への旅行者』のエリー運河からナイアガラの滝方面の記述に全て沿うものである。おそらく本書を目にしていたであろうホーソンと共に旅をするつもりで、本書冒頭の「序文」と、ホーソーンの旅の経路と関わるロチェスターから始まりナイアガラの滝に至る部分を訳出してみた。

以上、2021年度特別研究期間における研究成果についてここに報告する。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。